クレセント・イクリプス

月見里夕夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
クレセント・イクリプス

【Ｎコード】
Ｎ３６５１Ｑ

【作者名】
月見里夕夜

【あらすじ】
フリーの傭兵であるグランスの家に、ある夜、一人の少女が訪れた。少女は追われている身で助けてほしいという。しかし、グランスはそれを受け入れなかった。それでも食い下がる少女。ついに折れたグランスは、少女とある契約を交わしたのだった。

始まりの夜

1

雨が降りしきる夜。グランスは自宅のベッドで読書をしていた。雨が屋根や窓を叩く音を聞きながら読書をするのが、グランスのたしなみの一つだった。

ドン。ドン。ドン。

唐突に誰かがドアを叩いた。

「チッ、誰だよ。こんな時間に…」

グランスは眉をひそめ、ドアを睨みつける。

「…っ」

すると、鍵がひとりでに回り、解錠された。そして、ゆっくりとドアが開きはじめる。そして、ドアの向こうから姿を現したのは一人の少女だった。金色の髪は乱れ、服も泥まみれだ。全身ずぶ濡れで、あちこちから雫が滴り落ちている。

「う…ぁ……たす……け」

呻くように何かを呟きかけ、糸が切れた傀儡人形の様にその場に倒れる。

「お、オイ！」

グランスは慌てて駆け寄り、少女を抱き起こす。そして、少女の口に掌を翳して呼吸しているかどうかを確認する。掌に風が当たる感触がする。気を失ってはいるが、少女は生きていた。しかし、服の所々には血が滲んでいる。

「チッ…」

小さく舌打ちをした時だった。ドアの向こう側に広がる暗闇で何かが瞬いた。同時にグランスの左手が動き、手甲で何かを弾き飛ば

した。それが床に落ちてカランと音をたてる。
「チッ、針か…」
グランスめがけ飛んできたのは、五寸釘ほどの長さはある針だった。よく見れば表面が濡れている。グランスは少女の襟首を掴み、乱暴に家の奥に投げ込む。
「悪く思うなよ！」
グランスはそう言いつつ、次々と針を弾いていく。
「オイ、テメェ…。隠れてねェでいい加減出て来いよ」
グランスは玄関を塞ぐように立ち、剣を構える。すると、雨の中に一人の影が浮かび上がった。黒装束に身を包んだ男だった。
「何だ。テメェは…」
「これは失礼しました。私、お嬢様をお迎えにあがった使いの者です」
男は右腕を体の前で肘から折り曲げ、深々とお辞儀をする。
「で、何の用だ」
「先ほど申しましたように、貴方が匿われている少女をお迎えにあがったのです」
男の返答に、グランスはうすら笑った。
「もし、俺が嫌だと言ったら？」
お約束の問いかけをしたグランスは、その後の展開に心躍らせていた。
「そうですか…。私は戦闘が苦手な者ですから、ここは交渉といきましょうか」
「フン、交渉か…」
少々期待はずれな展開にグランスは顔をしかめつつも、そう焦る事はないと自分をなだめる。
「そうですね。可能な限り貴方の要望にお応えしますので、その代わり―――」
「却下だ。俺に望みなんてねェよ。俺は気まぐれと金で動く人間だ。だから今日は俺の気分を害してくれたテメェをぶち殺したい気分な

んだよ」
　グランスはバキバキと指を鳴らして、今か今かとその時を待ち焦がれていた。
「私の命と引き換えにしてまで少女は欲しくありませんね。交渉決裂ですか、仕方ありません」
　男はやや呆れた様に溜息をつく。
「じゃあ、俺に大人しく殺されてろ。いや、もがいてもらった方が気持ちが良いな…」
　グランスを満たす狂気が、目の前の男が自分に叩きのめされ、必死に命乞いをする姿を思い浮かべさせて止まなかった。
「すみません。私、あなたには殺される気は毛頭あ――――」
　そう言い終える前に、グランスの姿が視界から消えたことに気付いた。同時に、男は肩口からバッサリと斬り裂かれ、鮮血が雨と混ざり合った。
（馬鹿な…！？　全く見えない…）
　男は今自分が目の当たりにしている状況が呑みこめないまま、地面に倒れる。
「ガ……ハ…グホァッ」
　男は倒れたことで背中に衝撃をうけ、肺に入りこんだ血を吐き出す。
「ククク…。どうだ《死ぬ》って感覚は？　怖いだろ。泣き叫びたいだろ。なら、俺にテメェの絶望を聞かせろよォ！！」
　グランスは右目を紅く輝かせ、吠えるように高らかに笑った。その姿は、まるで勝鬨をあげる狼のようだった。
「あなた…まさ、か…《流星》…」
　男は眼を見開き、声を震わせグランスの二つ名を呼んだ。
「今頃気づいたか。だが、もう遅ェよ…」
　グランスは、一瞬にして男のすぐ脇に立ち、剣先を首につきつける。
「言えよ。誰の差し金で来た…」

グランスは声を低め、男を凄む。
「フフフ…敵に止めを刺さないとは…。甘いですね」
不意に、男の懐から何かが飛び出した。
「っ！！」
反射的に右手が動き、その剣先が男の喉を切り裂く。鮮血の飛沫がグランスの顔の右半分を染める。
「チッ…。何だこりゃ…？　首輪か…？」
男の懐から飛び出し、グランスの首に巻き付いたそれは、ロザリオのついた首輪だった。
「クソ、ハズレねぇぞこれ」
幸い、何かが起こるというようなことはなかったが、どうやっても外れなかった。
「チッ、仕方ねェ。アレを使うか…」
しかし、右目が再び紅く光る事はなかった。
「…！？　使えない、だと…？」
グランスは激しく動揺した。グランスには《流星》と呼ばれる力があり、身体能力を著しく上昇させる事が出来る。しかし、さっきまで使っていたはずのそれが、全く使えなくなっていた。
「…こいつの所為か」
グランスは忌々しそうにロザリオを掴み、握りしめる。一度家の方に目をやり、立ちあがる。そして、死体となった男を一瞥してから家へと歩き出す。雨がやみ、かすかな泥の匂いを鼻が感じ取っていた。

2

ルナは、ある種の焦燥を感じていた。雪に埋もれた植物が春の訪れをじっと待つかのように、ルナの中の何かが目覚めの時を待ちわびているように思えた。しかし、それを感じる度に疼くような痛みが全身を襲った。次第に痛みは強くなり、耐え切れなくなったルナ

は目を開けた。
「……」
開けた視界には、見覚えのない天井が広がっていた。さっきまでの痛みが嘘のように消え、ただ静かに呼吸する自身の音だけが聞こえていた。
（あれ…？　私、どうしてこんなところに…）
頭に靄がかかったようにおぼろげで、自分がどうなったのか分からなかった。
「よォ、起きたか…」
聞き覚えのない声に、ルナは体を起こそうと体に力を込める。
「やめとけ。大人しく寝てろ」
ベッドに寝そべるグランスは、読書をしながらぶっきらぼうに言い放つ。ルナはグランスに従い、体の力を抜いた。
「あの……」
ルナは顔をグランスに向け、礼を言おうと口を開いた。しかし、グランスと目があった瞬間、何故か気恥ずかしさが込み上げ、ルナは思わず布団を顔半分までかぶってしまう。
「俺はグランス。傭兵だ。あと、礼とかはいいから、テメェが何者かだけ教えてくれればそれでいい」
グランスはルナの思考を先読みするようにそう言って、ギロリとルナを睨む。ように見えるが、実は普通に見ただけである。目つきが悪いだけで決して睨んでいるわけでない。
「わ、私はルナって言います。その…逃げて来たんです。研究所から…」
ルナはしどろもどろになりながらもそう言った。
「お前、遺伝子覚醒者の被験体か…」
「っ！！」
グランスの口から予想しなかった言葉が飛び出し、ルナは激しく動揺した。
「どうして、それを…」

グランスは本にしおりを挿み、パタリと本を閉じる。
「俺もテメェと同じ遺伝子覚醒者だからだよ」
そう言ってグランスは蒼い右目を見せる。
「あ……」
それを見たルナは、思わずと言ったように言葉をこぼす。それから、少し悲しげな表情になる。
「テメェの金色の右目。それもそうなんだろ？」
グランスがそう訊ねると、ルナは苦々しそうな顔をして小さく頷く。
「もしかして、グランスさんも、研究所で…？」
「俺はそんなとこいた覚えはねェよ。俺はただの傭兵だ」
グランスは淡々と答える。しかし、表情は何故か険しいものだった。
「で、テメェはこれからどうする気だ？　追われてるんだろ？　追手は俺が殺したからしばらくは来ねェだろうが、なるべく出発は早い方が良いんじゃねェか？」
グランスは、まるで厄介者を追い払うかのように淡々と助言をする。ルナは肩を落とし、うなだれる。しかしすぐに頭をあげ、グランスは真っ直ぐ見る。
「あの、図々しいかもしれないですけど…。お願いがあるんです」
真剣な表情でルナはグランスと向き合う。しかし、それはグランスにとって予想内の展開だった。
「私を、私を助けて下さい。お願いします。何でも、何でもしますから…」
今にも泣きそうな顔で懇願するルナに、グランスは無性に腹が立った。グランスは立ちあがり、ルナの前まで来るとルナの胸倉を掴みあげる。ルナはビクッと体を強張らせる。
「テメェ、それ本気で言ってんのか？　なら、俺がテメェのカラダを要求したら、テメェはその要求を呑むのか？」
凄むような低い声で、グランスはルナに訊ねた。ルナは今にも泣き

出しそうなほど涙を両目いっぱいに溜めていた。
「そ……それ、は……」
ルナは喉元につっかえている言葉をどうにか絞り出すが、殆ど言葉にならなかった。
「…ろくな覚悟もねェくせに、そんな事を軽々しく口にしてんじゃねェよ」
グランスはルナを離し、再びベッドで横になる。
「あ……。うぅ…っく」
ルナは遂にダムを決壊させ、その場に泣き崩れてしまう。
（チッ…。これだからガキは嫌いなんだよ。）
グランスは無性に腹が立った。恐らく、過去の弱い自分と重ねているのだろう。過去のグランスは、本当に無力な子供だった。生きる為に必死になって、幾つもの罪を犯した。
と、そこまででグランスは考える事を辞め、さっきの本を手に取り再び読み始める。しかし、一向に内容が頭に入ってこない。
「チッ…」
グランスは本を閉じ床に放り投げると、そのまま目を閉じて夢の中へ逃げ込もうとした。だが、寝付く事は出来ず、しばらくの時が流れた。
いつの間にかルナの嗚咽は止まり、急に家の中が静かになった。グランスは耳を澄まし、
ルナの様子を伺った。布団を退ける音。足が床につく音。床の上を歩く音。そして、足音がグランスのすぐ横で止まる。
「お願いします。何でもしますから私を助けて下さい」
さっきのような弱弱しい声ではなく、凛と力強い声だった。しかし、グランスは少々あきれ気味に横目でルナを見た。
「んなっ…！」
意外すぎる光景にグランスは飛び起きた。
「テメェ…自分が何してるか、分かってんのか？」
グランスが睨む先には、土下座するルナの姿があった。揺るぎな

いその姿に、グランスは不覚にも気圧される。
「はい。だって、命の恩人に私はまたすがって助けてもらおうとしているんです。見かえりや役得が無くちゃ理不尽じゃないですか」
土下座を崩さないまま、ルナは言った。しかし、ルナの体がかすかに震えている事に、グランスは気付いた。
「お前…なんでそこまでして助かりてェんだよ」
グランスは、昔の自分にもした同じ質問をルナに投げかける。
「分かりません。でも、私はただ生きたいんです。だから、お願いします」
ルナの凛と澄んだ声が、部屋の静寂に木霊したように思えた。
「…俺はテメェを助けるつもりはねェ。だが、テメェが自力で助かる為の手伝いはしてやるよ」
グランスは、自分の出した答えが余りにも可笑しくて、思わず笑ってしまう。
「あ、ありがとうございます！」
ルナは、輝くような笑顔を見せあげた顔を再び下げる。
「言っとくが、これは契約だ。俺は傭兵だからな。契約期限はテメェが一人で生きていけるようになるまで。だが、途中で生きる事を諦めたらその時点で契約は強制破棄だ。いいな？」
生きることへの執着。それが今、グランスとルナを繋いだ瞬間だった。
「はい！　よろしくお願いします！」
元気良く返事をするルナを見て、グランスは笑みをこぼす。しかし、それを見られたくなかったので、そっぽを向く。
「…今日はもう寝ろ。明日は街へ買い物に行くからな。お前の武器や服も買わねェといけねェしな」
グランスはぶっきらぼうにそう言った後、そのままソファに横になる。
「ん…？　服…？」
その言葉に何か引っかかりを感じ、ルナは自分の体を見下ろす。

「…っ！」
ルナはようやく、自分が来ているのが自分の服でないことに気づいた。ルナは慌てて辺りを見回し、自分の服を探す。
「あ…」
服は壁に繋がれたヒモに干されていた。そして、その横には――
――
「グランスさん。もしかして、私の……見ましたか？」
ルナはゆでダコのようになった頬を押さえながら、グランスに訊ねた。
「何だって？　俺が何を見たって？」
しかし、グランスは肝心なところを聞き逃し、訊ね返す。ルナの頬が更に紅潮する。
「だから…。その…ですね。私の…」
ルナは恥ずかしさで言葉を詰まらせ、上手く言葉が続かない。
「だから、もっとはっきり言えよ。聞こえねぇって」
グランスは、もじもじしたルナの態度にじれったさを感じ、つい急かしてしまう。だがその瞬間、ルナの中の何かが解除された。
「だから、私のハダカ見ましたか！？　見ましたよね！？　見たんですよね！？」
ルナは両目いっぱいに涙をため、顔から火を吹いて怒鳴る。それには流石のグランスも度肝を抜かれたが、直ぐに元の態度に戻る。
「別に見たくて見たわけじゃねェし、興味もねェから安心しろ」
実際、着替えさせている間に抵抗や羞恥はなかった。ルナの体つきはひかえめだというのと、仕事中に女性のけがの手当てなんかもしているから、グランス自身特に気には留めなかった。
「うぅ…。酷いです。女の子に向かってそんな事を…」
震える声で、絞り出すようにルナはそう言った。グランスは寝返りを打ち、ルナを見る。
「ゲッ！？」
見ると、ルナは大粒の涙をぽろぽろと零していた。余りの光景に

グランスは飛び起きる。
「な、泣くなよ！？　そんなハダカ見られたぐらいで！」
「ハダカ見られたぐらいで！？　重要な事ですよ！！　しかも、興味が無いなんて言われたら、私…うぅぅ」
グランスに散々激昂したルナは、そのまま布団に突っ伏してしまった。
「……。チッ…、悪かったよ。訂正する。全く興味がなかったわけじゃねェ」
グランスは渋々そう言ってやると、ルナはひょいっと顔をあげる。
「でも、面と向かってそう言われると正直引きます」
「じゃあどうすりゃいいんだよ！！」
嫌そうな顔をするルナにグランスは全力でツッコミをいれる。
「ケッ…、もう寝るぞ」
グランスはソファの背もたれに向き合うように寝そべり、目を瞑る。
「本当は、私が風邪引かないようにする為だったんですよね」
ルナは、ほんの少しだけ嬉しそうにそう訊ねた。
「うるせェ。さっさと寝ろ」
「グランスさんって、本当は優しいんですね」
その何気ないルナの言葉に、グランスは心臓が鷲掴みにされたような感覚に陥った。
「……。俺は、優しくなんかねェよ」
グランスは低い声で答え、そしてルナに聞こえないように小さく呟く。
「単に、甘いだけだ」

始まりの夜（後書き）

初の連載小説を始めました。更新周期は月二回です。拙いかもしれませんが、どうかよろしくお願いします。出来れば感想もいただけるとありがたいです。

買い物　前編

グランスは夜明けとともに起床し、自己鍛錬に励んでいた。傭兵にとって腕の衰えは依頼の所為効率低下につながり、最悪命に関わる。だから、グランスは毎朝トレーニングに励むのが日課となっている。

「ふぅ…。今日はこのくらいにしておくか…」

本来ならば『流星』の制御訓練もするのだが、今はグランスの首に着いたロザリオ付きの首輪によって封じられてしまっている。

「あいつに聞けば、何か分かるかもしれねェな…」

昨日、グランスの家に逃げ込んできた少女ルナは、遺伝子覚醒開発をしている研究所から逃げてきたと言っていた。ルナに聞けば、このロザリオに関して何か分かるかもしれないとグランスは考えた。ロザリオを一度握りしめ、グランスは家へと戻った。自宅に戻ると、ルナはベッドの上でぐっすりと寝ていた。

「フッ、お気楽なものだ」

そうは言いつつも、追ってから一晩中逃げていたのだから、仕方がないのかもしれないのかもしれない。グランスは脱衣所へと入り、汗で服を脱ぎ捨て浴室に入る。蛇口を捻るとシャワーから冷水が一気に飛びだし、グランスの表面を流れ落ちて行く。自分の体を流れ落ちて行く水を見ながら、グランスはこれからの事を考えていた。

ルナの追手はグランスが殺した。だが、その追手と連絡が取れないと分かれば、向こうは間違いなく次の刺客を送り込んでくるに違いない。グランスの家は町から少し離れている為街に被害が出る可能性は低い。しかし、ルナをあぶり出す為に街で暴れるか、待ちに居るところを襲われれば、決して少なくはない死傷者が出る。多かれ少なかれ街の皆に世話になっているグランスとしては、その事態だけは避けたかった。

「もう、道は決まってるみてェだな…」

グランスは蛇口を閉め、浴室を出る。そして、用意していた下着

とズボンを履き、脱衣所を出る。すると、いつの間にかルナは起きており、グランスに気付いたのか振り返る。
「あ、グランスさん。ってきゃぁあああ！！　なんで上半身ハダカなんですか！？」
グランスが上に何も来ていないことに気づくと、ルナは赤面した顔を手で覆い、叫ぶ。
「…お前一体どんな貞操観念持ってんだよ。それじゃ海水浴にも行けねェだろ…」
勝手に一人で真っ赤になって騒いでいるルナに、グランスは溜息を洩らす事しか出来なかった。
「そそそ、それとこれは話が別で…。その、グランスさんの引き締まった体が…って、とにかく服を着て下さい！！」
ルナは完全にテンパっていて、何か色々と口走った後、最終的にそっぽを向いてしまう。幸い、グランスはルナが口走ったあれこれを聞き逃していた。
「はぁ、分かったよ。着ればいいんだろ？」
グランスは、これ以上騒がれるのも鬱陶しいと思い、戸棚から服を取り出して着る。
「ほら、これでいいだろ？」
ベッドに座り込んだまま拗ねているルナに、グランスは声をかける。ルナは振り返り、グランスが服を着ている事を確認すると、ホッと胸を撫で下ろす。
「もうちょっと人目というのを気にしてくださいよ。全く…」
「うるせェ。買い物行くからさっさと着替えて準備しろ」
大きなお世話だと言わんばかりに嫌そうな顔をするグランスは、そう言って出かける準備を始める。
「あ、あの…。グランスさん？」
「…なんだよ」
ルナは、キュッと手を握りしめ、少しだけ俯いている。心なしか、頬がほんのり赤みを帯びている気がする。

「あの、ですね…。着替えたいので、後ろ、向いていてもらえませんか？」
「無理だ」
「なっ、なんでなんですか！？」
あっさりと即答された（しかも否定）ルナは、思わず目を見開く。
「俺だって準備があるんだ。それに、お前の見たところで別にどうってことねェし」
グランスの心ない言葉に、ルナは激昂する。
「どうしてそんなにデリカシーが無いんですか！　しかも乙女心を傷つけるなんてヒドすぎます！　その、少しくらいは…」
しかし、最後に何かを言いかけて、ついには黙り込んでしまう。
「そんなに見られたくねェなら、脱衣所で着替えろ。ついでにシャワーも浴びとけ」
グランスはそれだけ言うと、着々と出発の支度を整えていく。
「むぅ…」
ルナはムスッとした表情でグランスを睨んだ後、ベッドから降りて干してあった自分の服を引き千切るように回収する。そして、それらを両手で抱え込みながらルナは脱衣所へと消えて行った。

「もぅ、ヒドいよ。グランスさん…」
ルナはサイズの合わないブカブカな服を脱ぎ捨て、浴室に入る。そして、鏡に映る自分の姿をじっと見つめる。小柄で慎ましやかなルナの体には、昨夜負ったはずのかすり傷の一つさえ残っていなかった。それは、ルナの肉体が普通の人間とは異なっている事を意味していた。
忌々しい自身の体。どうして私はこの体を持って生れて来たのだろう。数えるのが嫌になる程そんな事を考えた。この体を持って生まれさえしなければ、今頃自分は普通の女の子としてありふれた日常の中にいただろう。
「もう、考えるのはやめよ…」

鏡の中の自分に呼びかけ、ルナは目を瞑り深呼吸をする。そして、目を開けると鏡の中のルナと再び目が合った。ルナはシャワールームのドアを開け、中へと入った。そして、シャワーの蛇口をひねる。すると――――

「ふひゃぁぁあああああああっ！！」

シャワーから出てきたのは温水ではなく、冷水だった。それを頭から被ったルナはたまらず変な悲鳴を上げる。

「んだよ、うるせェな。ちっとは静かにシャワー浴びろよ」

悲鳴を聞きつけて来たのか、グランスは容赦なくシャワールームのドアを開ける。

「何で冷たい水が出るんですか！？　心臓止まるかと思いましたよ！！」

グランスを認識したルナは、その怒りの矛先をグランスに向けて思い切り激昂する。

「仕方ねェだろ。温水出ねェんだから、それくらい我慢しろ」

グランスはやれやれと言った表情で、ルナの矛先をスルリと避ける。

「それより、さっさと体拭いて出かける準備しろよ」

グランスはそう言ってバスタオルをルナに目がけて放る。

「あ……」

暫くグランスを凝視した後、自分の体を見下ろす。そして、ボンッという音が出そうなほど顔が一気に赤くなる。

「あ、ぁ…」

「ア？　何だよ」

呻くような声を漏らすルナに、グランスは苛立ちを覚える。

「さっさと服着て――――」

「きゃぁぁあああああああああああああああああああああっ！！！！！！」

グランスの苛立ちは、ルナの大絶叫によって一気に吹き飛んだ。

「オイ、いい加減に機嫌直せよ」
「ふん！」
ルナはツカツカとグランスの前を歩く。グランスは大きくため息をつきながら、ルナの後をついていく。
「だいたい、ハダカ見られたのは今回が初めてじゃねぇんだから別に――」
「初めてじゃないからってそんなの理由になりません！！」
グランスの弁解に、ルナは百八十度ぐるりと回転してグランスに怒鳴りつける。
「んだよ。じゃあ、どうすりゃいいんだよ…」
正直、ここまで言われるとグランスも気がめいるらしい。
「自分で考えて下さい！！」
ルナはそっぽを向いて、またツカツカと歩いていく。
「なぁ、お前に訊きたい事があるんだが…」
「……」
反応はない。
「この首輪って、何だか分かるか？」
「……」
これもまた反応はない。
「オイ、いい加減にしろよテメェ…」
段々声が荒げてくる。グランスは痺れを切らし始めたようだ。
「その首輪は、封魔の首輪です。遺伝子覚醒を抑える為に作られた物です。私も研究所にいた時は付けてましたから」
ルナは、淡々と振り向くことなく答える。
「じゃあ、お前これ外せるんだな」
「はい。私には微弱ですが生体電気を操る力があります。貴方の家の鍵を開けたのもそれを使いました」
遂には事務的な口調になり、歩行速度をドンドン速める。
「あっそ…」

グランスはその後街まで一言も話さずにあるきつづけた。

「ふわあぁぁ…」

街に辿り着くと、ルナは感嘆の声をあげる。

「人がいっぱいいるよ！」

ルナはさっきまでの険悪なやり取りなどすっかり忘れて、興奮気味だった。

「普通だろ。街なんだから…」

グランスは呆れつつも無意識に笑いをこぼしていた。はしゃぐルナは、きょろきょろと街並みを楽しそうに見ていた。

「ほら、買い物の目的はそっちじゃねェぞ」

グランスは、ルナとはぐれないようにルナの手をパシッと掴む。

「ひゃわっ！？」

ルナは咄嗟に可愛く悲鳴をあげて、振り向く。

「さっさと買い物済ませて帰るぞ」

グランスは実に簡潔に告げると、そのままルナの手を引いて歩きだす。

「あ、あの…グランスさん？」

「あ？　何だよ」

ルナはグランスの手をキュッと握って、俯き気味に頬を赤らめている。

「いや、その、手――――な、何でもないです」

ルナは何かを言いかけたが、途中で黙りこくってしまう。一方のグランスは、ルナの声が小さくて聞き取れなかった。

「何だよ。さっさと行くぞ」

グランスは特に気にも留めず、そのままルナの手を引いて再び歩く。ルナは呆けるように、細身の割に広いグランスの背中をずっと見つめていた。

「ほら、着いたぞ」

「へっ…？」

グランスの声に我に返ったルナは、素っ頓狂な声をあげてしまう。グランスの指差す先を見ると、拳銃型の看板が建物の壁から吊るされ、《ガンスミス・ゲイルの店》と書かれていた。
「ここって…」
「あぁ、これからお前の護身用拳銃を買う」
拳銃。それを訊いた瞬間、ルナの鼓動がドクンと跳ねる。嫌な感じがルナの中を巡るのが本人にも分かった。
「言っとくが、お前が買うのは人を殺す道具じゃねェ。お前自身を護る為の道具だ」
ルナの思考を読み取った様に、グランスは言った。ルナは一瞬驚き、思わず顔をあげる。「武器持った奴に丸腰じゃ勝てねェからな」
グランスは苦笑いを混ぜた表情でルナを見ていた。
「そう、ですね…」
ルナも笑って返したが、何かまだ言いたそうな表情をしていた。しかし、グランスは気付くことなく、そのまま店の中へと入っていき、ルナは慌てて後に続く。中に入ると、カウンターで暇そうに一人の男が頬杖をついて客が来るのを待っていた。男は体格が大きく、浅黒い肌で、頭はスキンヘッドと、いかにもという感じの身なりをしていた。
「相変わらずネーミングセンスねェな、オイ」
グランスは馴れ馴れしく、暇そうな男に声をかけた。
「うるせえよ。俺がネーミングセンスねぇこと知ってるだろ？」
店主ゲイルは吐き捨てるようにグランスに返した。たが、ゲイルがグランスの後ろから顔を覗かせるルナに気づくと、ニタァっとイヤらしい笑みを浮かべる。
「で、今日は連れがいるみてえだが、ひょっとしてデートか？」
「で、デートぉ！？」
ルナはからかうゲイルの言葉を真に受けて顔を真っ赤にしているが、グランスは深くため息をついて呆れ果てていた。
「デートだァ？　普通こんな埃くせェ所来ねェよ。買い物だ、買い

物」
　グランスがそう言ってやると、ゲイルは眉をひくつかせながら立ちあがる。すると、グランスの後ろにいたルナがビクッと震えた。何故なら、ゲイルが予想以上の巨漢だったからだ。カウンターに座っている時もそれなりの大きさだったので、体が大きい事はルナにも予想は出来たが、正直ルナにとっては予想以上だった。
「オイ、急に立つから俺の連れがビビってるぜ？」
　気付いていたのか、グランスはルナを親指で差してニヤリと笑う。
「おっと、悪いな嬢ちゃん。脅かす気はなかったんだ」
「だ、大丈夫です。ちょっとおっきくてびっくりしただけです」
　謝るゲイルに、ルナは笑って返した。
「そういや、お前まだ自己紹介してねェよな。一応世話になんだからしとけよ」
　グランスは二人の妙な空気を払ってやる。
（こいつ、ムカつくくせにこういう気の利いたこと出来るんだよな…）
　そう心の中で思いつつも、ゲイルはグランスの計らいに感謝せざるを得なかった。
「あ、あの、初めまして。ルナって言います。その、今日はよろしくお願いします！」
　しどろもどろなルナの自己紹介に微笑ましさを感じつつ、ゲイルも自己紹介で返す。
「俺はここの店主のゲイルだ。よろしくな、嬢ちゃん」
　ゲイルは大きな右手を差し出して、ルナに握手を求める。ルナは一瞬ためらったが、その大きな掌に自分の小さな手を差し出す。すると、ギュッと強い力で握られたので、ルナはビクッと体をすくませる。
「あ、悪い。痛かったか？」
「あ、いえ…。その、いきなりでびっくりしただけですから…」
　これまた、さっきと同じような展開にグランスは思わず腹を抱え

て笑いそうになった。
「オイ、デジャヴはその辺にしとけよ。俺はこいつと話しがあるから、お前は店内でちょっと良さそうな銃を探しておいてくれ」
グランスが助け船を出してやると、ルナはコクンと一度だけ頷いて店の奥へと駆けて言った。
「で、話って何だよ…」
ゲイルは低い声で訊ねた。だが、良くない話である事はグランスの表情から察せられた。
グランスは顔を近づけ、小さく告げた。
「あいつは恐らく、あの研究の被験体だ。しかも、かなり完成度が高い」
「――――っ！？」
思わず声をあげそうになったゲイルはぎりぎりのところで踏みとどまり、どうにか堪えた。
「…あの研究は、お前の件で永久凍結されたんじゃねェのかよ」
苦悶の表情を浮かべるグランスは、ギリッと奥歯を噛みしめる。
「今のところは何とも言えねェが、とにかく、俺にはアイツを守る義務がある」
グランスは強い信念の灯った鋭い眼差しで、店の奥を見据えた。
「お前の事だから、ここを出るんだろ？　でもよ、行く当てはあるのかよ…」
「正直なところない。だけど、他の街でも俺と知り合ってる連中は幾らかいるから、困った時はそいつ等から力を貸してもらうさ」

◇　◇　◇

（二人とも、一体なにを話してるんだろう…）
ルナは店内を巡回しつつも、二人の様子をずっと伺っていた。声は聞き取れない。でも、表情から読み取る限り、余りいい話ではないようだ。声が聞きとれない以上、これ以上様子を伺っていてもし

ょうがないので、ルナは店内に置かれている銃に視線を移す。ショーウィンドウに飾られているもの。箱に入れられているもの。大小さまざまな銃が店の中にはあった。研究所で生まれ育ったルナには、どれも見覚えのないはずの銃器達。だが――

「やっぱり…。私、知ってる」

ルナは、一度も見た事が無いものに対する知識を持っていた。銃器の扱い方だけではなく、調理器具の扱い方やあらゆる機械の操作方法なども知っている。それが、ルナにとっては気味が悪くて仕方なかった。

「嫌……」

肩が震え、胸が苦しくなる。自分が一体、どれだけのものを抱えているのだろうと思うと、発作のようになる。

「オイ、大丈夫か？」

突然、ポンと肩を叩かれたルナは反射的にその場から飛び退く。見ると、肩を叩いてきたのはグランスだった。呆気にとられたグランスの表情を見て、

「ご、ごめんなさい…。その、びっくりして…」

とだけ言ってルナは黙り込む。

（ごめんんさい…）

ルナは、心の中でもう一度謝った。

◇　◇　◇

ゲイルとの話が終わり、グランスはルナを呼ぼうと店の奥へ向かった。少し行くと、ショーウィンドウの前で茫然と立ち尽くしているルナの姿があった。

「オイ、何か良いのはあったか？」

呼びかけてみたが、反応はない。表情も何処か虚ろな気がする。しばらく様子を伺っていると、ルナは急にその場で震えだしていた。グランスは、店の前での会話を思い出し、その事だと思った。

「オイ、大丈夫か？」
グランスが肩に手を置いた瞬間、ルナはその場から弾かれるように飛び退いた。これには正直、グランスも驚いた。ルナの瞳の奥に一瞬だけ敵意を感じ取ったからだ。
「ご、ごめんなさい…。その、びっくりして…」
ルナは謝ると、そのまま黙りこんでしまう。ただ事ではないな。グランスはそう思った。
「あ、ゲイル。お前のとっておきを出してくれねェか？」
グランスはカウンターから様子を伺っているゲイルに視線を向ける。
「応！！　その言葉、どれほど待ち焦がれた事か！！」
ゲイルは見悶えるように体を震わせた後、親指を天井に向かってビシッと突き立て、カウンターの奥へと駆けていった。
「……？」
ルナに視線を戻すと、ルナは何がどうだか分からないと言った表情を浮かべていた。
「ま、そのうち分かるぜ」
グランスはルナの無言の問いかけを、笑って誤魔化した。
しばらくすると、ゲイルがカウンターの奥にある物置から帰って来た。
「あったぜ。嬢ちゃん、こいつらを使ってやってくれねえか？」
ゲイルが持ってきたのは箱だった。少しばかり誇りを被っているが、結構新しい。
「開けても、良いですか？」
「ああ、いいぜ」
二人の奇妙なやり取りを、グランスは隅で顔を歪めて笑った。ルナはそんなグランスに気づくはずも無く、ゆっくりと箱のふたを開ける。すると、中に入っていたのは二丁の拳銃だった。
「……綺麗」
正直ルナ自身、拳銃に向かってその形容を使うとは思ってもみな

かった。だが、それを使うだけの美しさが、その銃にはあった。大口径リボルバー式と小口径自動式。素朴でありながらも洗練されたフォルムには、何か流れるような模様が刻まれている。そして、全体として青味を帯びた黒色をしており、更に模様も相まって、まるで流星を思わせるような美しい拳銃だった。

「名前はねえから、嬢ちゃんが付けてくれよ」

「え…。私が、ですか…？」

ルナの問いかけに、ゲイルは笑顔で首肯する。ルナはゆっくりと箱に収まった二丁の拳銃を見る。そして、その二つを両手に取り、グリップを握る。ズシリと重たい感触が、その存在を知らしめてくる。

「双子の流星（ジェミニ・スター）…」

ふと、ルナの頭の中にそんな言葉が過った。

「…いい名前じゃねえか。大事にしてやってくれよ」

ルナが顔をあげると、ゲイルが嬉しそうに笑って親指を突き立てていた。

「はい！」

ルナは元気よく返事をして《双子の流星》を胸に抱いた。何と言うか、道具というよりパートナーという感じだった。

「おっと、こいつを忘れるところだったぜ」

ゲイルは何かを思い出すと、カウンターの下からホルスターが二つ付いたベルトを出した。

「これに入れておいた方が便利だと思うぜ」

ルナは一度《双子の流星》を机の上に置いた後、ベルトを腰に巻いた。それから《双子の流星》をそれぞれのホルスターに収める。

「どう、ですか…？」

ルナは頬少し赤らめつつ、二人に訊いた。

「似合ってるじゃねえか！」

と、ゲイルは称賛したが、

「流石にむき出しだと危ねェから、コートで隠した方が良いな」

と、グランスは冷静な突っ込みを入れた。だが、ルナはグランスの言葉など気にも留めず、ホルスターに収まった《双子の流星》をずっと見ていた。
「うっし。武器も手に入った事だし、次は服と防具を買いに行くか」
グランスはカウンターに片腕を乗せ、ゲイルに訊ねる。
「で、いくらだよ。これ、お前の自信作なんだろ？」
「あぁ、今回限りは要らねえよ。嬢ちゃんのあの笑顔で腹いっぱいだ。ま、次来た時はお前からがっぽりボらせてもらうがな」
「安心しろ。もう二度と来ねェから」
ガハハハと豪快に笑うゲイルに、グランスは一言返してやると、そのまま身を翻した。
「オイ、いつまでもファッションショーやってねェで行くぞ。だいぶ時間食っちまったからな」
グランスは、くるくる回ったりして喜んでいるルナに一言言うと、そのまま店を出て言った。
「あっ、ま、待って下さい！」
ルナは慌ててグランスの後を追いかけようとして店の出入口まで来たところで振り向く。
「あの、今日はありがとうございました！　また来ますから！」
「おうよ！　いつでも大歓迎だぜ！」
ルナの笑顔に、ゲイルも笑顔で返した。
「――――また来ます、か……」
ゲイルは、店を出て遠ざかっていく小さく力強い背中を眺めながら一人呟いた。

買い物　前編（後書き）

暫くぶりの更新です。今月は後一、二回ほど更新します。
よろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3651q/

クレセント・イクリプス

2011年2月11日10時40分発行